

近江絹糸人権争議、ある現地オルグの回想

— 富士宮工場での記録 —

島根県・元UIゼンセン京都府支部長・金田直樹

この記録は、労働運動史に残る近江絹糸の人権争議の時、富士宮工場を担当し、宇佐美忠信さん（ゼンセン同盟第4代会長・現UIゼンセン同盟顧問）のもとで現地指導にあたられた田中時雄さんに話を聞き、「聞き書き」の形にまとめました。田中さんは、ゼンセン同盟大阪府支部長を最後に勇退され、現在は京都市に住んでおられます。平成15年2月28日にこの話を聞かせてもらいました。（編者注：田中さんは平成16年9月22日ご逝去）

まとめるにあたりましては、状況をより細かく表現するために、オーミケンシ労組の労働組合三十年史「大いなる翼を広げて」、田中さんの記録「点描」、田中さんから提供いただいた近江絹糸労組富士宮支部機関紙「労燈」13号、ほか新聞のスクラップを参考にさせてもらいました。（作成：平成15年3月13日）

この間は「総同盟との訣別、左傾化した総評からの脱退について話したんだなあ。今日はなにを話そうか。うん？「近江絹糸の人権争議の話を知りたい。全織同盟史と滝田実さん（全織同盟第三代会長）著「わが回想」、宇佐美忠信さん（全織同盟第四代会長・現顧問）著「和して同ぜず」は読んだので争議の概要はつかんでいる。争議をやっていた工場のような感じだったか、それを聞いて参考にしたい」と。分かりました。あの頃を思い出しながら話してみよう。

近江絹糸の労働者と全織の接触は昭和24(1949)年からあったんだ。人権争議は、昭和29(1954)年5月25日、本社に全織同盟の労働組合が結成され、15項目の要求を決定する。そして6月2日決起大会で22項目の要求を決定し、3日に要求書を提出し団交申し入れするが会社は全面拒否、組合はこれに怒り4日午前9時半からストライキに突入するわけ。ここから始まったんだよ。あれから49年、半世紀だね。戦後の労働争議の中でも画期的な、労働運動史に特筆される大争議ですよ。そうなんだけれども、今、どれだけの人が覚えていてくれるだろうかねえ。

あの頃、全織同盟の青婦対策部長をしていた私は、6月2日、富士宮工場の担当で現地に入りました。旧国鉄の富士駅と富士宮駅を間違えながら身延線を行きましたよ。宇佐美さん（元ゼンセン会長・宇佐美忠信現顧問）とわたしが本部派遣で、現地からは、その頃まだ富士紡労組小山支部の役員だった矢田彰君（故人・元ゼンセン中央教育センター総主事）と全織同盟静岡県支部の事務局長だった故・田代新一さんに常駐してもらいました。組合からの応援は、全織加盟の各組合からとオルグ養成講座修了生（今の労働大学）、近江絹糸本社労

組をはじめ全労傘下の造船とか海員組合、常磐炭鉱の労働組合からも来てくれましたよ。長期間泊まり込みの人もいたし、日々交代の人もおりました。決まったメンバーで現地にいたのは20人位だったかなあ。宿泊は「亀屋旅館」で、ここが現地本部です。ここに決まるまでは「労働組合」ということでなかなか借りるのが難しく、田代さんの骨折りでやっと借りられたのです。

106日間の争議は、山あり谷ありでしたよ。辛いこともいろいろあったなあ。振り返ると大きな、いや大変だったと言った方がいいかなあ。そんな争議でした。全工場を合わせての話になるけれど、この時、応援に来てくれたオルグは延べにして6万人ですよ。その中で、会社や会社が雇った暴力団、第三組合との衝突でケガをしたのは400人。国内外からは多額のカンパが寄せられましたよ。

痛ましいのは、自らの命を絶った人たちです。自殺です、3人ありました。未遂が3人です。その一人は記録映画「立ち上がる女子労働者」にも出ていますが、東京支部で執行委員をやっていた中村善五郎さんです。熱海で国鉄の列車に飛び込み命を絶ちました。「近江絹糸の従業員がどれほど苦しんでいるか、夏川王国にはわからないだろう」という遺書を残してね。

また、精神を病んで入院をした組合員は9人もありました。富士宮工場からは女子組合員が一人。私が付き添って沼津の病院まで送りました。胸が痛んだねえ。

これを聞いてもらっただけでも、大変さが分かってもらえるじゃないかな。応援に来てくれたオルグ団の人たちもよく耐え、動いてくれました。小ぜり合いが絶えずある中でピケをはらなくてはならないし、第三組合の人たちを、全織の組合に入るように説得活動もしなくてはなりません。ピケを交代して待機組に入った人にはレクリエーションや労働歌の歌唱指導をやってくれましたよ。

「第三組合と言われたけどそんな組合があったのか？」って。そう、これを少し説明しよう。昭和21年に近江絹糸労働組合は結成されていた。労働組合らしきものと言ったらいいと思います。御用組合って言われてましたよ。順序を付けるとこれが第一組合。そこにこの争議で全織同盟の組合が各事業所に結成されたから、全織の組合が第二組合ということです。第一組合では持たないということで第三組合を作ったわけです。第一組合は御用組合というレッテルを貼られてしまって組合員の信頼を失ったから、体質を変えなくてはならないということになったのでしょう。表紙だけを代えた本のような物ですよ。この第三組合を作って「全織同盟に入らなくても労働条件の交渉はちゃんとやるから」と足場固めを始めたわけです。1400人位いたですよ。

「第三組合の人を説得するのはどうだった？」って。うん、正直言って最初のうちは苦しかったです。他の工場に比べてなかなか全織の組合員が増えなくてね。組織率は悪かった。いろいろ理由はあった、あまりそれを言うと言い訳になるしね。今だから言えるけれども地理的な環境が一つありました。富士宮工場の近くに、自分たちの労働条件を比較する紡績工場がなかった。それと夏川イズムが徹底していて私生活の監視も厳しかったですよ。会社は門をピタリと閉ざして、外部から入れないようにしているので中の人たちと直接に話ができません。だから塀の外からマイクで呼びかけるんです。工場は三交替深夜操業をしていましたから、男子寄宿舍には24時間誰かがいたわけです。この呼びかけに応えてくれまし

たねえ。これを始めた6日にすぐ数名が塀を乗り越えて脱出して来てくれました。この人たちは工場に帰れませんから亀屋旅館に泊めましてね、いろいろと話を聞きました。それを参考にして、仲間をさらに募る方法を考えたり、組合結成の準備に取りかかったわけです。工場の中にいる人たちは、男子女子を問わず、彼らの動きに関心を持ったんですよ。次々と脱出をしてこちらに参加をしてくれましたから。そうすると一軒の旅館だけでは足りなくなってね、数軒の旅館を急ぎょ借りました。貧しい農家に育ってきた人のなかには、旅館で出る白いご飯を食べながら涙を流していましたよ。

そして6月9日、60人で全織の労働組合を結成し、ストライキに突入しました。この時に力を貸してくれた一人の青年がいました。4月に本社から転勤してきたばかりの寺田尚夫君です（故・初代支部長）。本社組合を結成した幹部たちとは“同期の桜”の関係があったのではないかなあ。富士宮でもなんとかしなくてはならないという使命感を持っていましたよ。この青年に、私と矢田君とで、ある日の夜半ひそかに浅間神社で会うんです。就業規則や工場の実態を聞いて、それを宣伝や説得活動に活かしました。

「労働組合を結成して、いよいよ会社と団交に入る」って。うん、そうなんだ。組合員が増えたことだし、いつまでも旅館生活というわけにはいかない。工場の中にこちらの拠点を持つ必要があるしね。そこで「我々も従業員だ、工場への立入を認めよ」という要求をして交渉を申し入れた。しかし会社はこれを受け入れなかったねえ。

「そこで激しい衝突が起こった？」って。そう、会社が認めないなら実力行使ですよ。こちらの組合員90人と全織のオルグで12日朝、工場の板塀を破って突入したんです。その時食堂で第三組合が大会を開いていましたね。向こうは1300人ですよ。食堂に入ろうとするこちらと、それを阻止しようとする第三組合員との間で乱闘です。この時わたしはその先頭にいたんですが、10数名の向こうの組合員に拉致されてしまいましたね。「田中さんを奪還せよ」と宇佐美さんはじめみんなが助けに来てくれましたよ。この衝突で矢田君は右手をけがするんです。

この後も大変でした。向こうは机でバリケードを築き、太鼓を鳴らして社歌や修養団の団歌を唄う、こちらは旗をふって労働歌の合唱です。第三組合と全織組合が一触即発の雰囲気の中で対峙しましたよ。

「この騒ぎを聞きつけた大勢の市民が応援に来てくれた？」って。そうなんだ、市民の人たちが集まってきて「全織に入れエ、全織に入れエ」と声をかけてくれましたよ。そうしていると第三組合の集団の中から、手をつないでパラパラとこちらに駆け込んでくるんです。それを市民の人達は拍手で激励をしてましたよ。

市民の人たちの応援は有り難かったですね。それでも始めのうちはそうでもなかったんですよ。と言うのは、日産自動車の工場が近くにあって、前年に左翼の運動家が指導した「日産の吉原争議」が発生していたんです。これは激しい争議で、結局は労働組合は分裂しましたけどね。そう言うのを見ていましたから、労働組合は危険で怖いと、市民の間には労働組合を嫌悪する空気が強くありましたよ。

「会社の評判が悪かったのか？」って。うん、市民の目が好意的だったのは、会社の評判が悪かったこともありますね。工場の近くの堀に人糞を流した噂もあったし、近江絹糸はケチで、祭りの寄付も出さない、と言うこととかね。

それとこの争議で、わたしたちは当然なんだけども、総評が指導した組合のように政治闘争をからめなかった。人権問題を具体的な要求としてかかげていましたから、市民の皆さんも分かりやすかったんです。米帝国主義粉砕なんて叫ばない、労働組合でも日産自動車の組合とは違うぞと言うことになった。全織同盟の姿勢が理解されたと思いましたよ。それに、働いているのはほとんどが中学校を卒業してきた15歳から20歳前後の少年少女達ですよ。男子はそれに三交替で徹夜をさせている、あんな子供達にひどい仕事をさせている、ということで評判はますます悪くなりました。

「富士宮工場には大きな山場がいろいろあったと聞いている？」・・・と。うん、いつも市民の皆さんから応援の声に励まされながらやりました。応援の声が高まってきたのにはいくつかの事件があったんです。そのたびに争議団にはパンとか弁当の差し入れがあったねえ。ケガをした人を近所の人達が手当をしてくれました。

一つは12日にこちら側が塀を突き破って工場に突入したでしょ。そしてわたしが拉致され、矢田君がケガをした。その場面が、当時、映画館で劇映画の前にやっていたニュースに写った。これは全国でやりますからねえ、会社はひどい事をする、となったんです。二つ目は6月21日、怒った市民1000人あまりが工場内に乱入する事件が起こったんです。この日の夜、たまたま寄宿舍脇の道を歩いていた街の人に、女子寮の誰かが「新組合のロボット、アカ」と罵声を投げかけたんです。それを聞いてその人は怒った。周辺の街の人がドット集まって、たちまち板塀を破って工場に乱入です。1000人ですから大変な事ですよ。武装警官が出動する騒ぎになったんですが、会社と第三組合の幹部が平あやまりに謝ってなんとか納めた、と言う事がありました。

「宇佐美さんが検挙されたって事件はその時か？」って。いやいや、宇佐美さんと組合員3人が検挙され、数十名の組合員が負傷した事件は、7月13日のことです。この時の事件で、新組合に対する支援と組合員の熱気は一気に盛り上がったね。これが三つ目の出来事です。事の起こりは6月下旬に会社側が、新組合員の工場内立入禁止と、製品、原料などの搬出入妨害禁止を求める訴えを静岡地裁に出したことです。地裁はこれを認めた。会社はこの決定を背景にこの日トラック十数台を出して製品の搬出をくわだてたわけ。このトラックの接近を見た女子組合員がたちまち工場の正門に集まってピケをはる。ある者はトラックの運転手に、製品を運び出さないよう説得にかかる、あるいは車体にしがみつき声をからして、涙を流しながら訴えましたね。男子は車輪の前に身体を投げ出して「俺をひいてから行くならいけ」と絶叫していました。

ここに待機をしていた武装警官隊が「ピケは交通妨害だ、排除する」と、襲いかかってきたんですよ。未成年組合員一人に数人が。警棒をピケを組んでいる腕と腕の中にこじ入れてねじあげる、警官はその点はプロですから、そして力まかせのごぼう抜きです。その間にトラックはエンジンを吹かしながら、ジリジリと門に近付いてきた。だがピケの最前線は崩れかけても正面のスクラムはガンとして崩れないし、退かなかつたですよ。警官隊も強行突破をあきらめて、双方それからはならみ合いです。そして夕方4時頃だったと思うけども、警

察署長が宇佐美さんに対して「ピケをとくか否か、10分間の余裕を与えるから返事せよ」と言ってきた。警察は実力行使に入るぞという最後通告をしてきたわけですよ。

「決断を迫られた、緊迫した時だった？」って。そう、警官隊が襲いかかれば混乱と負傷者が出る事は避けられないからねえ。

宇佐美さんはピケ隊の幹部に意見を聞いた。「どうだ、スクラムを解くか、がんばるか」言下に「がんばる」の声ですよ。ピケラインにも問いかけた。「みんなどうする」一斉に「やる」「死んでもどかない」の必死な声、その声に続いて習い覚えた労働歌がわき上がりしました。「・・・そのかげに死を誓う、卑怯者さらば去れ、我らは赤旗守る」

宇佐美さんは、ピケの最前列のど真ん中にスクラムを組んで座り込みました。みんなは汗にぬれ、涙にぬれながら、労働歌を歌いました。涙声あり、怒りの声あり、ふりしぼる声あり、その歌声は津波のように高まりあたり一帯をつつみ込みましたよ。警官隊はそんな無抵抗のピケラインに突入しました。

彼らも誰を落とせばピケ隊を崩せるか、狙っているんですね。まず目をつけられたのが矢田君です。ごぼう抜きにかかる、周囲の組合員がそれをさせまいとする、もみ合いましたが、ついに矢田君はピケラインの外に引きずり出され、警官に取りかこまれて身動きができません。

次に警官隊が狙ったのは宇佐美さんですよ。大勢で襲いかかって足から引きずり出してね、コマンドカーに押し込むんです。後は殴る、ける、警官隊の一方的な暴行ですよ。悲鳴と怒号が禍まく中で、女子も男子も一人また一人と放り出されました。しかし、スクラムは崩れそうで崩れなかったねえ。その状況を、市民の方が大勢見ているんですよ。

「男子組合員の警官隊への体当たりもすごかったようだが？」って。そう、男子組合員は誰に教えられたわけではなく、守衛室の屋根によじ上り、旗を掲げながら、戦争中の神風特攻機のように、群がる警官隊真ただ中に身を躍らせ体当たりをしました。殴られてもけられても一歩も退かなかったですよ。小一時間におよぶ激闘のすえピケラインは守り抜かれました。警察とこうしてやりあったわけですが、みんなより闘魂が燃え上がったね。権力の事実に基づきましたから、権力に対する反発と怒りもすごかったですよ。

この攻防で、宇佐美さんと組合員3名が公務執行妨害で検挙されて、富士宮警察署に拘留をされたんです。また数十名の男女組合員が警察の暴行でケガをし、付近の家の人達が涙しながら手当をしてくれました。

「市民がこの後警察署を取り囲んだとか？」って。そう、市民は「警察がひどい事をしている」と聞いて大勢集まり警官隊をなじりました。目の前の警官隊の暴行を見て憤激を呼びましたね。夕刻、ピケ排除を諦めた警官隊が引き上げるや、市民は工場の中になだれ込んで「工場長を出せ」「全織の要求を認めろ」と叫びながらね、石を投げて、工場や事務所のガラスを一枚残らず割ってしまいました。工場の幹部は、思わぬ展開に恐怖すら感じたんじゃないかなあ。

市民はその足で警察署に押しかけて「宇佐美を返せ、連れていった者を釈放しろ、署長を出せ」と叫ぶ、石を投げる、ですよ。勢いは弱まりません、夜が深まるにつれて市民の数は

どんどんふくれあがる、ついに3000 余人が警察を包囲してしまったんです。慌てたのは警察です。警察も思わない展開にびっくりしたでしょうね。県下各署から500 人の応援をたのんで、まあ、やっと納まった。富士宮始まって以来の大騒動だったとあとで聞きましたよ。この時が大きなポイントだったですね。

宇佐美さんは検挙されて警察署に拘留ですよ。宇佐美さんは独房、3人の組合員は雑居房と離された。宇佐美さんは、3人の組合員が意気消沈してはいけないと留置場の中で労働歌を歌って励まされたそうです。自分では言われませんがね。振り返ってみると宇佐美さんも矢田君も、わたしも若かった。あの頃28か29歳でしたよ。

「総評とか社会党左派、共産党の共闘申し入れを断ったと聞いているが？」って。そう、このことでも全織同盟は素晴らしい組合と認知されました。国会議員でも、当時右派社会党の浅沼稻次郎をはじめ右派議員の激励は受けましたが、全織同盟を何かにつけて非難中傷していた総評とそのグループ、社会党左派、共産党の激励は断りましたから。当時、富士宮を含む静岡2区から出ていた、社会党左派の勝間田清一衆議院議員も、地元という事もあって激励演説をしたいと申し入れがありました。断りましたよ。こういう姿勢が認められましたね。

「野付さんというリーダーが、全織の組合に加入されたのも、組合拡大の大きな勢いになったと聞きましたが？」って。そう、野付さんの影響力は大きかった。野付さんは会社からも第三組合からも頼りにされていた。全織同盟も、あの人になんとかこちらに来てほしいと思っていましたからねえ。野付さんの加入で大勢は決まりました。彼は職場のリーダーだし、相撲が強くて、酒を飲むのも豪快、職場の信望が厚かったですよ。野付さんがこの決心をされたのは、宇佐美さんが検挙されたあの騒動の時だそうです。「これではいかん、この騒動を納めるには全織の組合入りだ」と。

野付さんが加入された時は、全織同盟大会を新潟市でやっており、宇佐美さんもわたしもそこにいた。留守隊長をしていた矢田君から「野付さんが加入した」と電報が入ってきた、宇佐美さんとわたしは「これで富士宮は勝負あった」と確信をしましたよ。信望厚い野付さんの動きにひかれて、350人あまりが新組合に来てくれたんです。それまでの400人から一気に700人を越え、それ以降爆発的に増えました。

(参考：野付さんは、この争議が解決してしばらくの後、全織同盟に請われて書記局入りをされ、支部長、常任中央執行委員、副書記長、副会長を務められました)

「市民の皆さんの好意を裏切ってはいけないと細心の注意をしたのではないか？」って。うん、市民の好意を裏切ってはならんというのは至上命題だし、それは祈りでしたよ。応援に来てくれたオルグの人たちにはよく話をし、注意もし、わたしたち自身も、日常の生活から争議指導などすべてに、非難をうけるような事をしてはならないと心しました。一言の言い間違い、一つの誤った行動で信頼を失いますから。

それでいながら、市民の信頼を裏切ったのではないが、私自身今でも反省している事があるんです。

全織加入の人数も増えて、大衆団交をやった時です。工場長と労務担当課長をみんなの前に座らせて、具体的に「食事の改善はどうするのか」「寄宿舎の改善はどのようにするのか」

と組合員の要望をまとめて交渉をしたんです。工場長も課長も顔色なしです、恐怖心でいっぱいだったでしょう。

回答をしてくれ、と言っても、ボソボソとした返事でね、そうすると、後ろの方におる組合員が「聞こえない、田中さん、工場長は今なにを言ってるんだ」と怒鳴る。それに答えるために、わたしが「今こう言っている」と後ろを向いて伝えるんです。こちらはバックもいっぱいですから、優勢な立場です。気持ちよくなりますよ。そのうちに工場長が「小便に行きたい」と言った。それをまた私が「工場長が小便に行きたいと言っているがどうする」と、みんなに問いかけたんです。組合員は「なにを言ってるんだ、田中さん、俺たち仕事をしている時は、自由に小便にも行けなかった。がまんさせろ」と返ってくるんです。

「今は人権闘争をやっているんだから、生理的現象は認めなくてはならない、わたしがついて行くから」と、一緒に行きました。二人で小便しながら「工場長ねえ、みんな怒っているんだから。夏川社長や本社に連絡をとる、次はよい回答が出来るようにするからと答えなさいよ。それで今日は終えるから」と話して団交の場に帰ったですよ。結局、工場長はこちらの詰めにそのように答えた。「みんなどうする」と聞くと「分かった、全織にまかせた、頼むぞ」と言うことです。

これを見ていた女子組合員が「工場長がかわいそうだ」ということで、こちら側からまた第三組合へもどって行った人もいました。それを引き戻すのに大変苦勞をした事があります。個人的な反省ですけどね。

「オルグ団の一挙手一投足に市民の目がそそがれていたとか、本当か？」って。そらそうだった。オルグ団として気を使ったのは、反感をもたれるようなことは絶対にしてはいかんし、言動には十分過ぎるぐらいに注意をして、行動は慎重であれと言いましたよ。男女間の風紀問題にも神経を使いました。オルグ団も若いし、近江の新組合員も20歳前後ですよ。青春時代そのものだし「こんな社会もあったんだ」という解放感と新鮮な日々ですからね。

市民の目は、オルグ団の一挙手一投足にそそがれていたと言っても過言ではなかったです。全織のオルグが口でどんな立派な事を言っても、言動が乱れていてはそっぽを向かれますから。

「いろんな心配も杞憂に終わった？」って。うん、富士宮には、当時、浅間参りの観光客目当ての赤線地帯がありましてね、売春防止法施行前の事ですよ、そこに若いオルグが通わないかと心配したねえ。この心配は杞憂に終わりましたよ。長い争議を通じてそう言う事をしなかったし、風紀の乱れはおろか、飲み屋で酒を飲んで歌う、大騒ぎをする、喧嘩をするなんてこともなかった。いろんな地域から日帰り応援もありました。旅の恥はかき捨て風の行動があっても、不思議ではなかったけどもそれも無かった。みんな真面目だったんですよ。わたしたちも、寝酒に差し入れの酒を飲む事がありましたが、押入れの中に頭をいれてそつとやったもんですよ。

大勢の応援が、入れ替わり立ち替わり来ましたが、街に金は落ちなかった。一部の人は期待外れだったかもしれないが、市民は、全織を立派だと評価してくれたと思いますよ。この事には、最後まで心くばりしました。

「調子のいい時こそ気をつけなくてはならぬ、と反省されたとか」って。そう、先程も話した、大衆団交で思いもよらない反感をだかれた経験からよけいにねえ。赤松常子先生（元全織同盟副会長・当時参議院議員）には、よくこの事は注意されていたんです。「紡績や織布工場には女子労働者が多い。そこで、高い所から演説をしていると英雄視をされる。それでいい気分になっていると失敗しますよ。特に男の人はそれをつつしまなくてはなりません」と、書記局会議でよく教えられましたよ。

調子がよい時、順調な時、有利な立場にいる時こそ、十分心しなくてはいけないと言う事です。他山の石としてください。

「**争議を続けながら、教育活動にも力を入れられた**」って？。そう、教育は富士紡労組小山支部の労働会館を借りて、リーダー的な組合員を30人ぐらいずつ、何回かに分けて一週間泊まり込みでやりましたよ。

組合に入って、やる気にもなり、意気があがっても、始めは労働組合がどんなものなのか、どんなことをするのか、分からないですからね。新しい出会いですから。一方で争議を続けながら、一方では教育に力を入れたですよ。そこで学んだ人たちが工場に帰って、「労働組合はこういうものなんだ、自分たちと同じ紡績工場で働いている人たちは、こんな生活をしているよ、労働条件はこんなだよ」などを仲間に話してくれるとね、わたしたちにはない説得力がありました。

学習したのは労働組合の基礎的な理論、労働基準法・労働組合法、同じ紡績工場で働いている人たちの事、労働条件とか寄宿舎生活。労働歌もちろん練習しました、ピケのはり方も。わたしは「軍曹」なんて呼ばれましたよ。町の本屋から六法全書が売り切れたと言われるぐらい皆さんは勉強をしました。

勉強をしたのはね、新組合の組合員だけではなかったんです。組合員はいろんな事を知りたいから、全織や応援に来ているオルグにいろいろと質問するわけ、質問される方も大変ですよ。理屈は得意ではないけど、お前は体力があるからがんばってこい、って送り出されている人もいる。自信を持って答えられない、そこで「これはいかん」とオルグ団も勉強をしたんですよ。教育は「後で」はないんです。よく言うでしょ、今この忙しい時とか、研修どころやないなんて、あれは間違いです。逃げの理屈に使っているか教育の大切さを知っていないかですよ。行動を起こしながら教育をする、勉強をする事で学んだ事が呼吸をするんです。

今は不況だ、合理化提案だ、リストラだ、希望退職募集だ、賃下げだ、組合員が減って組合の会計も大変だ、と、労働組合にとっては冬の時代です。けども今だからこそ、労働組合は教育が大切なんです。教育に目減りなしです。なんだか小言じみてきたなあ。

「**会社は家庭対策をやったそうだが**」って？。そうなんだ、会社が全織への対抗策として従業員の親元へ手紙作戦を始めた。組合員のほとんどは、東北、北信越地方の中学校を卒業して就職をしてきた15歳から20歳前後の年若い人たちですよ。争議が激しくなるにつれて噂を聞いたり、新聞を見て親としては心配ですわな。会社はそうした親が不安になったところを狙って、全織同盟と新組合批判の手紙を従業員の親元へ送ったんです。「全織同盟はアカであり、暴力団です」「あなたのご息は、その暴力団にだまされ監禁されている」「風紀が乱れ、男子と女子がザコ寝の始末である。女子は妊娠の恐れがあるが責任が持てない、

すぐ引き取ってもらいたい」なんて言うのを。これを読まされた親はびっくりして動揺しますよ。

もう一つ会社は、地方に駐在する労務担当を使って家庭対策をやったね。労務地盤にいる彼らが家庭訪問をして、先程のような悪宣伝をするわけです。親にしたら、子供が近江絹糸に入る時お世話になった人ですから、説得力はあるしそちらを信じますよ。それが人情でしょう。

多くの親は驚いて子供をむかえに来ました。田舎では見たことのない光景と、異様な雰囲気でしょう。そこで息子や、娘が鉢巻きをきめてピケをはっているわけですから、びっくりして強引に連れて帰る親もありました。

その組合員たちは、ピケをはっている仲間たちに泣いて別れをつける。見送る人たちは「乙女恋せば一筋に、炎と燃えよ麗しく、友と結べば鉄のごと、かたきよしみの上に立て…」と「同志の歌」を泣きながら歌った。去る者、見送る者が号泣しましたね。わたしたちオルグも泣いた、悔しかった、悲しかった、寂しかったねえ、あの時は。

「組合も家庭対策をやったと聞きましたが」って？。もちろん全工場でやりました。全織の書記局員や組合員が手分けして、それぞれの地方を訪ねて、争議の真相、会社の実状を話してね、会社が言ったり便りに書いてある事はウソだと説明をしたんです。この故郷家庭対策にあたった組合員によると、争議の前段の頃は話をしても「本当かな？」と言う表情だった親も、争議の終盤に行くと、雰囲気がガラッと違って、逆にあおられたそうですよ。新聞、ニュース映画で報道され、社会全体が「会社が悪いと言っている、その会社の犠牲に我が子になっている。許せない、組合の言っている事こそ正しい」と言う風になったんですね。

争議をする上で忘れてならないのは、世論の支持がなくては勝てない、という一つの例ですよ。組合の常識だけで「俺たちは正しい」と判断しては間違える事があります。社会常識に反していないかどうか、よく考えなくてはいけないと言う事かな。なんだ、だんだん説教じみてきたなあ。

「説教ついでに、この体験から後輩に伝えたいことを言ってくれ」って？。ハイ、分かりました。一つは、リーダーはウソをつくな、“はったり”はやめろ、だ。

二つは、組織として決めた事は、自信を持って指導せよ、だね。大衆迎合をリーダーがしてはいかん。大衆感情に流されるのではなくて、正しいと決まった方向に導いていかなければならんですよ。それ故に、組合員からよく言われない事もある、時には会社側になったのか、弱気になったのかと、中傷、非難される場合もある。自分の信念がぐらつく事もあるかも知れない。しかし組織の方針は守らなくてはいけないですよ。辛くても苦しくても「軸」をぶらさない事です。

三つは、問われる労働運動の闘いの評価ですよ。ストをやったとか、長期ストをうったと言うことだけでなく ① 組合員の利益は守られたのか ② 世論の支持はあったのか ③ 闘いを終えて、組織は強化されたのか、労働組合そのものの、組織内外から信頼度は高まったのか ④ 争議解決後の労使関係に、労使対等、協力と対決というルールができあがったか ⑤ 会社もその争議を機に企業業績も上向き、組合員の労働条件も高まったか… が問われるんです。この評価にたえる争議指導をしなくては。大きいことを言ったり、組合員をあおる

だけあおって、後はウヤムヤではリーダーは失格ですね。それと、大変俗っぽいことを言うけれども、労働運動にたずさわる者として忘れてならないことは一つに、金に関する不正をしてはいけない、二つに、人の道にはずれた女性問題を起こしてはならない、「金と女性」には特に身ぎれいでありなさい、ということですよ。… こんなことかな？

振り返ってみると、近江絹糸の人権争議は、いろんなことがあったなあ。争議発生以来106日目、9月16日に解決だ。長かったなあ。みんなよくやったし、すごいエネルギーだったよ。

ああ、話しているうちに大分時間がたってしまったなあ。今日はこのへんで終わりにしようか。

カネさんねえ、あなたも読まれたらよいと思う本があるんで、紹介しておくよ。渡辺淳一さんが書いた「白夜」です。中央文庫から出ています。5巻までありますが、Ⅰの防線彷徨（さすらい）の章とⅡの朝霧の章を読んでみてください。全織同盟とは違う路線のグループの「労働組合の虚像と実像」をそこに見ます、参考になると思うから。

こうして話をしていると、遠い昔のことが、わたしの脳裏に浮かび、だんだんと濃くなり鮮明になってくるんです。そうすると年齢を忘れて熱くなるんですよ。元気がまた出てきました。時には年寄りの小言や懐旧談になるけれども、なにか聞きたいことがあったら声をかけてください。じゃあ今日はここまでにしましょうか・…。ありがとう。

おわりに

この人権争議を経て、近江絹糸労働組合は、多くの人々の熱い視線の中で、新たな出発をしました。その後、発展を続け、民主的労働組合として、全織同盟はもとより、地域においても、リーダー組合として注目される存在になりました。

またこの争議の後、全織同盟の本部役員や都道府県支部長となる有能な活動家を、地域においては、地方同盟、後には連合に、各級地方議員にも優秀な人材を派遣され、労働運動、地域活動に大きく貢献され、今も活躍をされています。

（取材月日：平成15（2003）年2月28日：京都友愛連絡会事務所で）

(参 考)

人権争議 2 2 項目要求

1. われわれの近江絹絲労働組合を即時認めよ
2. 会社の手先である御用組合を即時解散せよ
3. 会社が指名せる労働者代表の締結せる一切の規定を撤回せよ
4. 拘束八時間労働の確立
5. タイムレコーダーの即時復活と残業手当の支給、賃金体系の確立
6. 合理的な退職金、旅費、宿直費規定の設定
7. 有給休暇・生理休暇の完全実施
8. 食堂の完備・更衣室の新設・社宅並びに寮設備の改善拡充など、福利厚生施設の充実
9. 宿直室の完備・専門宿直者・専門掃除夫及び各寮の専属炊事係即時配置
10. 仏教の強制絶対反対
11. 夜間通学など、教育の自由を認めよ
12. 結婚の自由を認めよ、別居生活を強制するな
13. ハイキング・音楽・映画サークルなど一切の文化活動を認めよ
14. 労働強化を強制する各種対抗競技を廃止せよ
15. 人権を蹂躪した信書の開封、私物検査を即時停止せよ
16. 密告者報奨制度・尾行等一切のスパイ活動強要をやめよ
17. 外出の自由を認めよ
18. 工場長に強制して行わせる月例首切り反対
19. 各課最低必要人員の即時補充
20. 重役の人権を無視した言動及び始末書乱発の禁止
21. 自動車部員の社内寄宿を廃止し、社外寮に引き移すこと
22. 自動車に対する傷害保険の即時加入